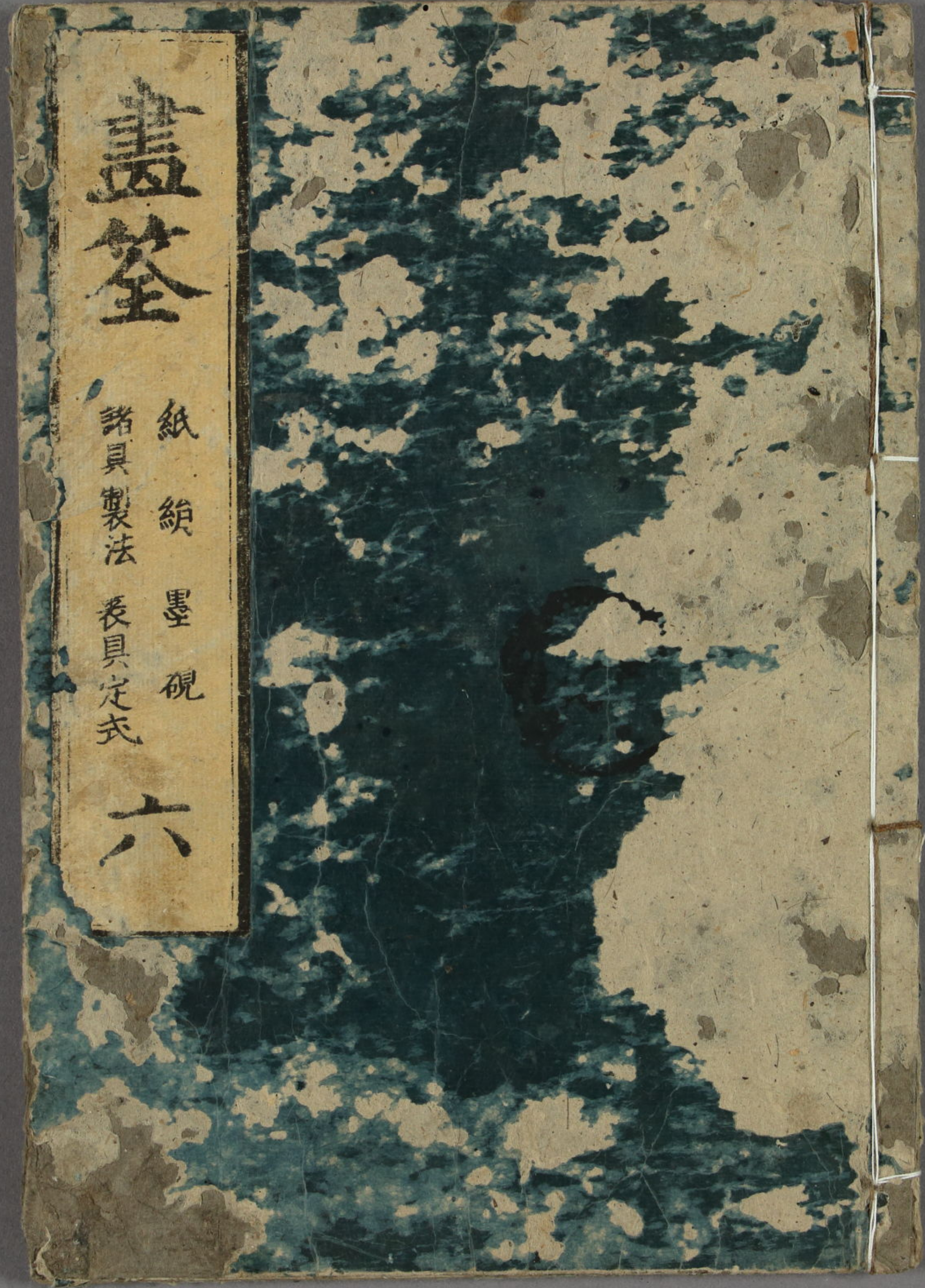


畫筌

紙 絹 墨 硯
諸具製法 表具定式

六



畫筌卷六

目錄

毛邊紙裏紙打樣 けららの 鑿水之法 けららの 毛邊紙假張之法

粉本紙續樣 あかき 燒筆 やき 裏燒筆 うらやき 碁盤割 いごばん

念紙作方 ねんし 蒙筆作方 もうし 朱印色之方 しゆいん

箔推方 はく 節作 ふし 研子振方 けんし 泥引之方 どひ

彫塗 うりぬり 殺塗 ころぬり 退塗 ひきぬり 隈採 くまどり

纓綯彩 えんぎんさい 拈端 ねんたん 繪帛張臺方 えいひく

板描畫法

繪絹

墨

筆

硯

紙

屏風押繪

屏風緣寸法

屏風色紙短冊及畫之貼樣極秘傳

表具寸法定式

表具作方

腐粘作方

屏風張方

蝶尾寸法

緣附方

軸物卷切方

掛繪三幅一對之事

同二幅一對之事

同四幅一對之事

大橫物之事

柱隱之事

卷物結方

三幅對秘方

掛繪可入渡事

同床掛事

同見方

同緒置方事

同床掛礼

同主位客位

同掛畫掛字包法

白繪之屏風

畫筌卷六目錄終

Table with 10 vertical columns and 1 horizontal header row, likely a table of contents or index.

書道全集卷之六

雜類

瓶前直方

林守雫 編輯

毛邊紙裏紙打様

先裏紙の作るに紙を少し羽目にしつて浮石を多く紙の端と磨切てく
は紙のかすきい方ともまじれ此として粘麩の粘りて粘りたるを
はまたりの裏紙も水と少し刷毛先を湯おき入し又粘りたる紙とに
の横幅より比つて切し用之を板の上にならしめて表と下を刷毛
毛と水と付くにつくと打かけ又少しと水と少し引くは初はは切
穿らす紙を取て表と下に切なりし裏紙も穿らすを穿らす方紙と
は返りたるに粘り付刷毛も擦り又裏紙の左方の上下の
角と捺す右端の方に引くは裏紙の表と上より横より引く

ろめ粘りやうなる紙一重曲せて片う紙の表を粘り引上下の
角とみ入るすくは粘れなくなれば上は被りゆくよみ水はけ
なく粘りしむ引くは傳し手に力おきハ皺に水より厚分
手ころと粘りに見ると此田の面と紙を接するを指に引らる史
めひきまひらるるかと巻くをて又そは粘りてくみまぐり
打を洗後紙の面へ掛けて乾くまでそは粘水として日用に
使ふ一但屏風乃上張の紙とせしめて用也

礬水之方

黄明膠 十石 明礬 五石 水 五斗 せん膠と水中に泡して
柔く成らう時器物の中へ熱湯と今手と住みかきまを膠の粘
り方明之の粘りと投て粘りまを冷して皮剥きまをくたらしまを引へ

又比してぬりたる時とも表の厚は粘りと付て紙は
らり付て中へ風を吹合らよよ一〇たう一を攪り水を合
せ又紙多ハ七勺席風ハ八勺をよ一〇又方膠十石
明礬 五石 〇 圖繪は皮ハ膠をまう一礬水一冬ハたうす
多くはるよか一とをよ一

毛邊紙假張之方

膠比しうたう一の表は水を引て返して裏のまうらよ粘と
付て又水を水中に水を引てまうして引起し紙は押し水刷
毛と引て擗紙とて又紙と切て裏紙乃紙の左に膠の隙に
付て入て皮剥きまをより籠に入らや強て皮にたうらまを
毛を引へ

粉本紙法様

義法紙は比として堅くしりしとまき一二夜も煮しりしと
とけし目と強し皺伸こしれと指まに板乃とまき
紙乃うらに粘と付てつとまき

焼筆

真植乃木と煮乃と削り小き方に火と付厚は埋と火を
用ゆ又紙を包ても備て之焼筆までと法と怪く描て恰好
足合也好又委く付ておまてけ、掃落してまきて筆金
描致て后おまて能くへ一畫史は紙筆とあり捨木と月也

雲焼筆

描しと思ふは中の裏に焼筆と付て是を画紙の上まき

上よりお常すてんけバ下よりつくりりまきと描て

基盤割

是は大なる圖と小すからう又ハ図と大よせんとも時必
りん念ふれものこそ時彼かとも罪のこころり描紙とも同く
別て其意とん合て字とこそ罪の寸方ハその時の大よれハ
罪の教ハ同教すれと先と基盤割と云地採入時こりとし
地採ハ或ハ屏風の畫かととんでるれを小く紙を筆字ハ小を
んで大よするか底のこりや

念紙作方

及紙も面紙ともさう先掲原紙を柔に揉み搦て皺を變
と細束し酒とひておれと煉りたぶとして刷毛を付て揉み

紙に付て目よかー描へ紙の上は炭粉の貼る方と下は
蓋をて又その上は粉本と重て竹篋にて推写しそより
写しそとせしめて描し是と念推と云

篆筆作方

猪と寒中の米泔を浸し毎日水と易く六七日及て出
鉄槌を打碎し和けて筆の管の裏を掃き去りて用ひ
陰の若樹花を茶をよみすり妙なり

朱印色作方

艾をよく揉て寒中の清水を曝し目よかー又よみて水まで
煮白にかし朱と蓖麻子の油と入て交合して朱と油の
本ありすり朱色とよて用と底を沈むるとれ又黄精を研

胭脂作方

滴推方

屏風などに滴と貼るは地ま丁子の炭湯をわりそよ
海粉と引く滴と貼る滴の厚より少のべ紙とより明桃の
油と淡かー塗て滴の上は蓋を塗りついてわらるそよとふ
のり引る上に推ゆる滴著るを換てつふそ炭の一方より
綿を入壺て是よ推しする時に油をそりて又地よ含炭
土をわりて金滴を貼つそよそわくハ又粘と引て二を
よおとす ○貼るの上は書と事ハ油氣と云へー紙と皮
と上は熟灰とそよ熱よよあして油氣と云なり

白粉盤作方

麿成ハ麿の皮と利の方みおす平の板此面は奉書紙
とのこて重きことと草にて深き周と粘りて付利の

箱切方

箱盤の上に箱を一枚置き、蓋て竹刀とみて十字字に裁
ねて、拂ひ箱に箱を箱に師は入ておと

師作方

箱の箱と云切て大中小の目をもり、よ作蓋て此箱の
大小は、及びお魚の目乃箱に入て振る

砂子振方

地は海産を引るとに砂子と師は入てありおまを乾くか
時常し或は古紙、振毛等、は箱に、さるも、(箱箱

を押し、こし、熱水を流し、ひきす

泥引方

金泥と粘りけし、付て地皮とする、こい、時、是の、泥、引、を
せぬ、こ、あ、り、

彫塗

是ハ、是、の、こ、こ、め、り、て、垂、れ、と、掛、ら、と、い、は、書、と、生、
く、粘、り、と、す、り、こ、こ、

殺塗

没骨と云、一、是ハ、是、等、と、い、ま、だ、一、て、全、体、を、掛、り、粘、り、と
わ、さ、り、こ、こ、あ、り、

退塗

墨色のこまよりわし引通てぬるとし胡粉とあつ時必る

隈探 くまぞろ 曲のまもも月

もしお新らとよなり時わたりて一方とぬ濃くしころ時と墨と
二ふ拵たりそつのみゆる墨と濃とといふ

襷縹彩 たすひょうさい

是に同じくこれ強具まで濃骨に濃ぬるとし和の宿女の
袖はかゝる重間よりすし縦に朱重間の時ほど胡粉ぬり
ゆりけしつさに肉色又濃肉を丹朱とぬぬるなり
何れも皆是し準して志取會

拵摺 たしとろ

凡此ぬりして端と拵と多の同じを利るし濃の卑処と

拵なり又胡粉のくるとは表のさすし拵ぬりする
濃くとも深赤と拵に浅赤と拵らぬりして拵なり
○朱丹肉色 燕脂具 黄土具 藤黄具 褐以紙の
生多し一まで拵る又褐と黄とい茶もてとる 靑葱
葉もて拵る 緑青 草緑 或は白緑 緋青 群青 胡粉
は同じく拵る

繪帛張臺方 えいひょうちやうたいほう

帛代大さおぬりて木と以て四角より作るしそと厚は張付の
みは是紙と薬く切て墨又墨よ飯粒とぬりたり
帛とく付てたの紙を粘と付て帛のうへは貼てよし
一方は膠地をすしてすし彩とすよの地ぬりと帛の

室の方より盤してぬるを及はるるものや一巻より一
よるに地より時粘のこにけれん強かうしてあー

板描畫方

膠と竹目明石粉と水と末をうけて地として下ぬりを
書と具よしぬる人紙かとい地よたぐんと塗るを又つと
おのりた

繪絹

糸目よ海うめて斤織うと活白うして襷帯あまは
墨

絹の製法はさういや一かす地引を用てぬし和の製法の
新なるは新よえ澤ありてより一粘りさくるを膠を乳

あつてあー

筆

毛おりの根つまうて腰のつよく毛を拵て割るよー

硯

紫石青石より長門の赤間名狭の宮河より出るよし

紙

毛邊紙の官紙を以て上品とんえおれと紙て古とら
るものよーと化よぬるは赤やりのあふー白きこり
と昔あわり撰ぶる

屏風押畫

と下と空れよの押畫紙と屏風の一回縁より申す

一方よりせりぬきおと三ツは別々上部の下をわき
他この寸分一と下は加六寸一横の寸法は細くしぬき
部より左右より又あはれ端の寸法は入おの寸分と
同寸分して堅へり此方を換くするなり

屏風縁寸法

五丈人の時の縁乃唐と寸七八分位小縁は小縁は
外分寸三分と寸二寸四分位小縁一寸四分は換三人寸
八九分乃寸二寸七八分なり

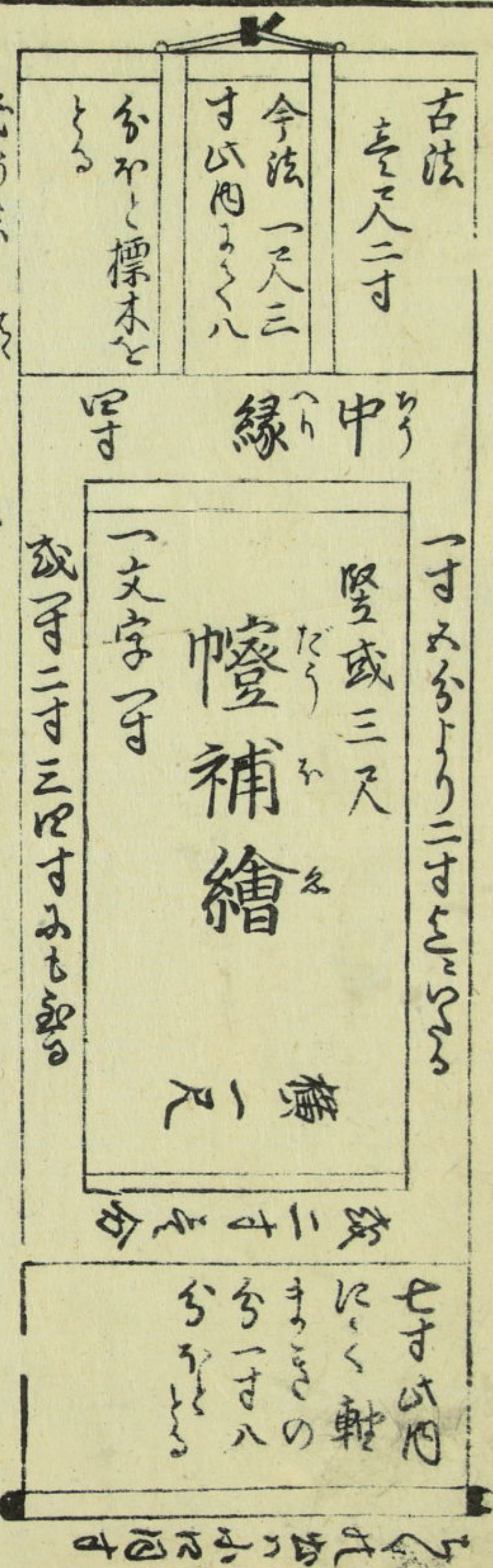
屏風色紙短冊及畫之貼様極秘傳

せん冠を穿りけり履と穿むた右と見合く押し是と
角と云四方角と穿ぬき又先んたうなる

押をまると云四寸六ツ等もをぬく又云又七八半と
いふまといともひよりいおさだを紙短冊に寸分畫末
を切しまりゆると目トと下れたの寸法を穿ぬく
四寸よりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
四時の縁乃あらぬ御製の前縁より穿ぬれぬぬ
墨畫の上位は推へり一尺寸之川なる画おしるるる
寸を極て遠くぬやうに寸分一と寸分の寸分と用て
何れと色紙の寸分あるの寸分寸分寸分寸分寸分寸分
乃寸分を縁の寸分一と寸分の寸分を加へり右好の
の者れ大秘事なり

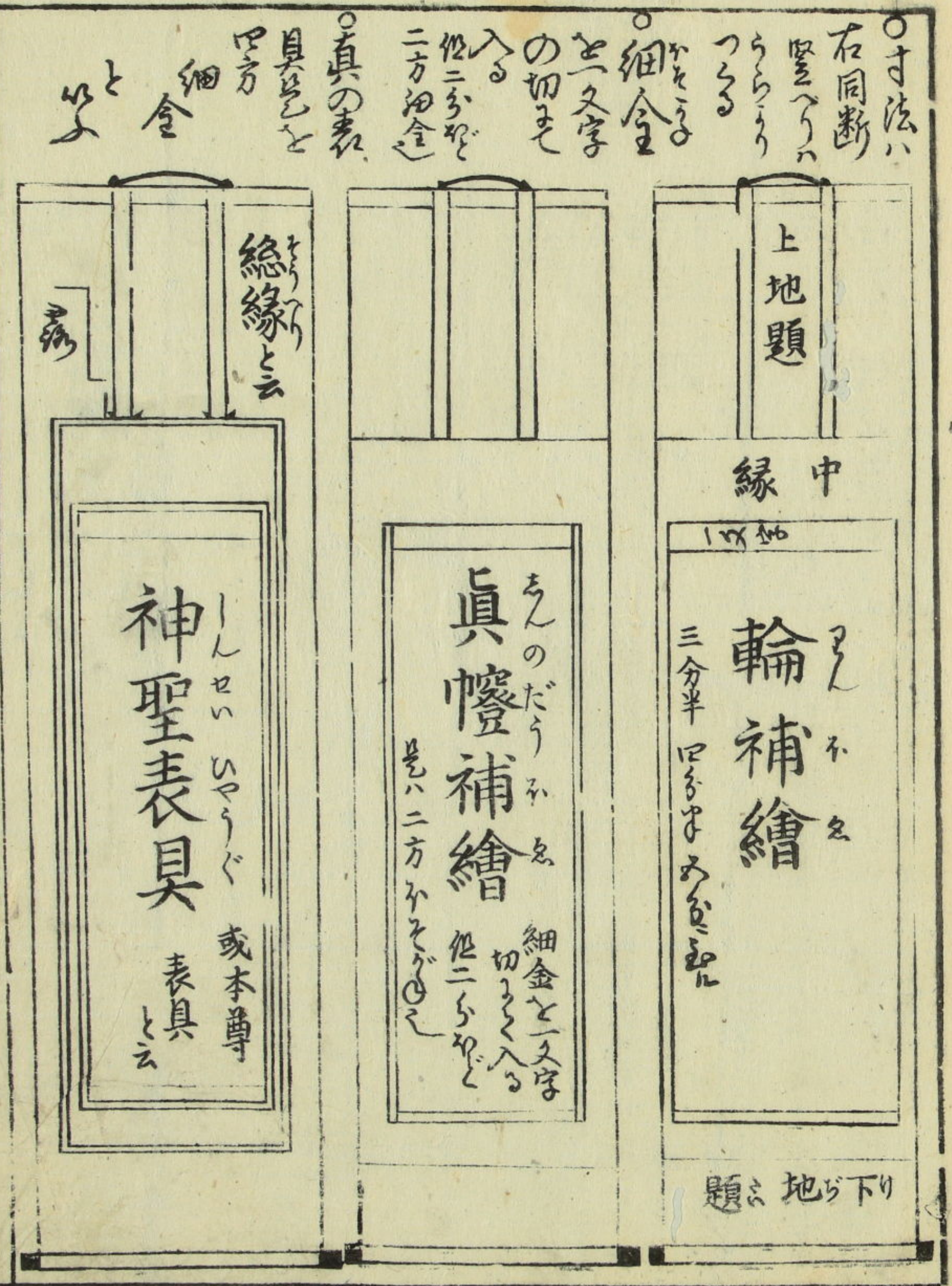
表具寸法定式

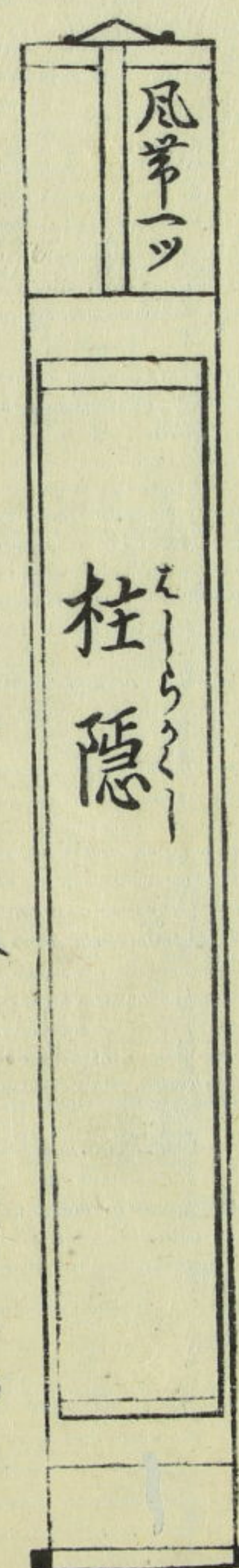
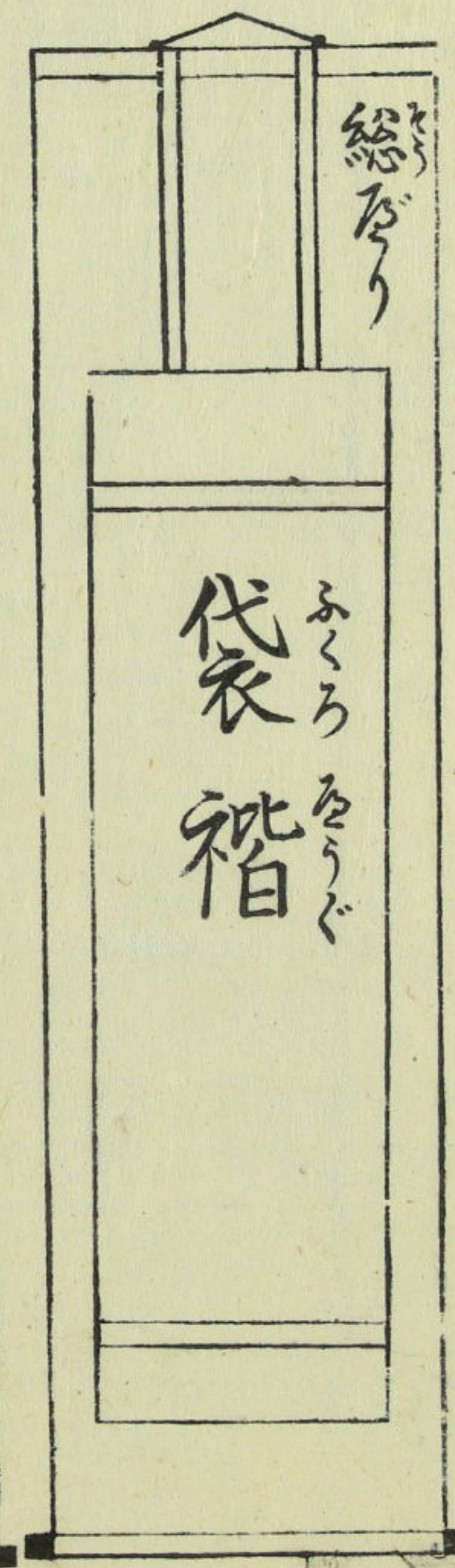
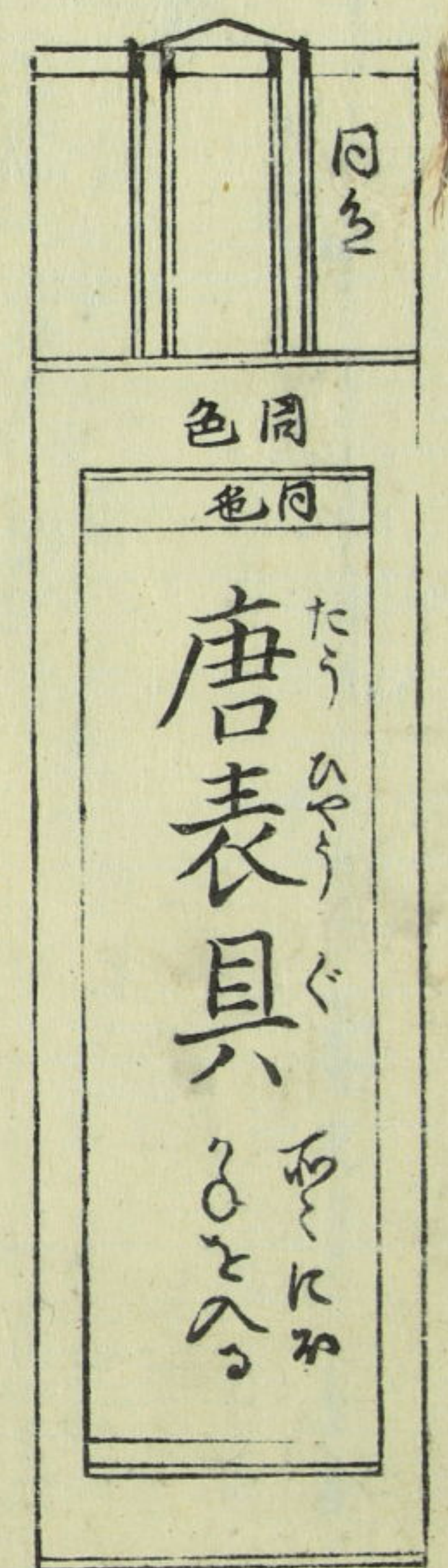
褶工之秘傳



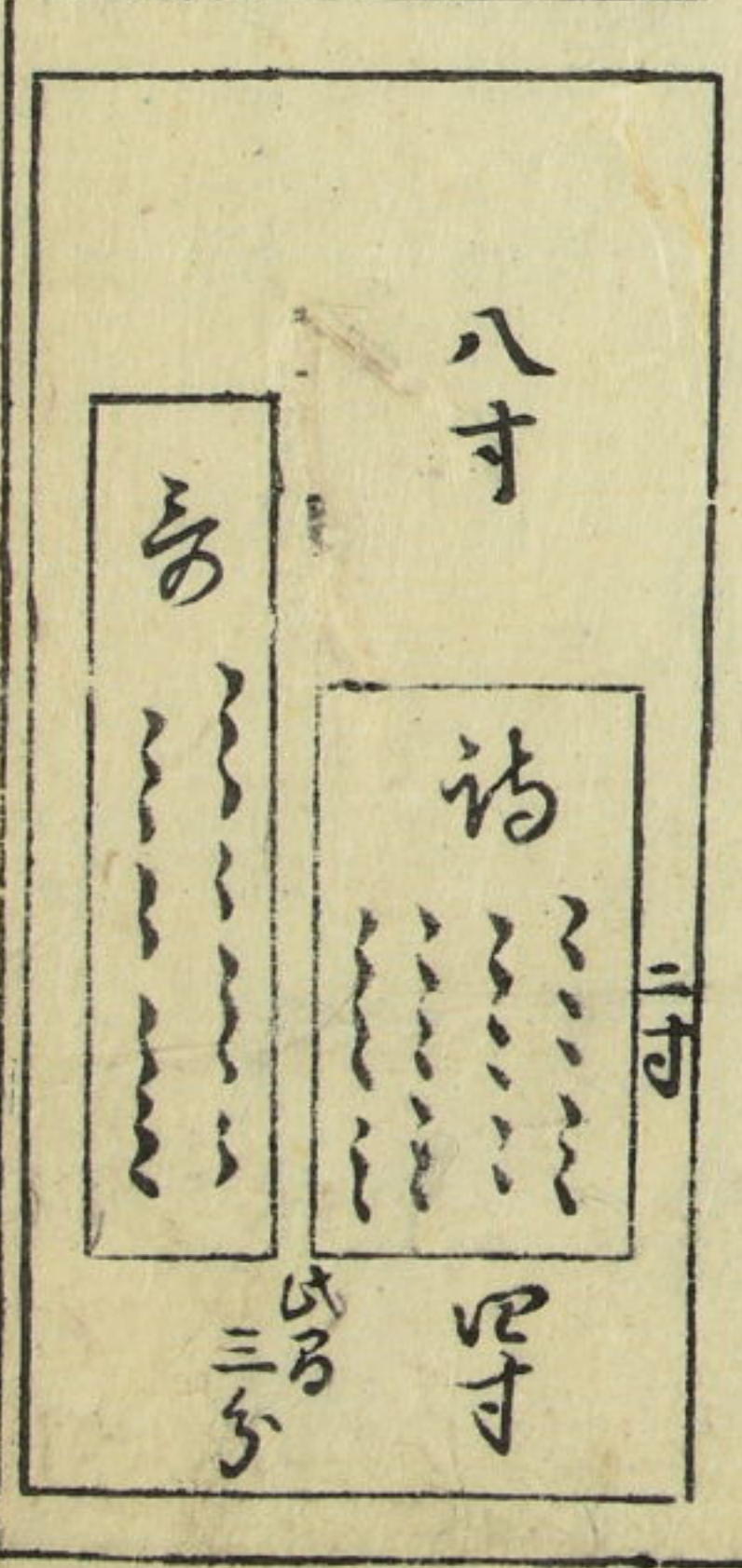
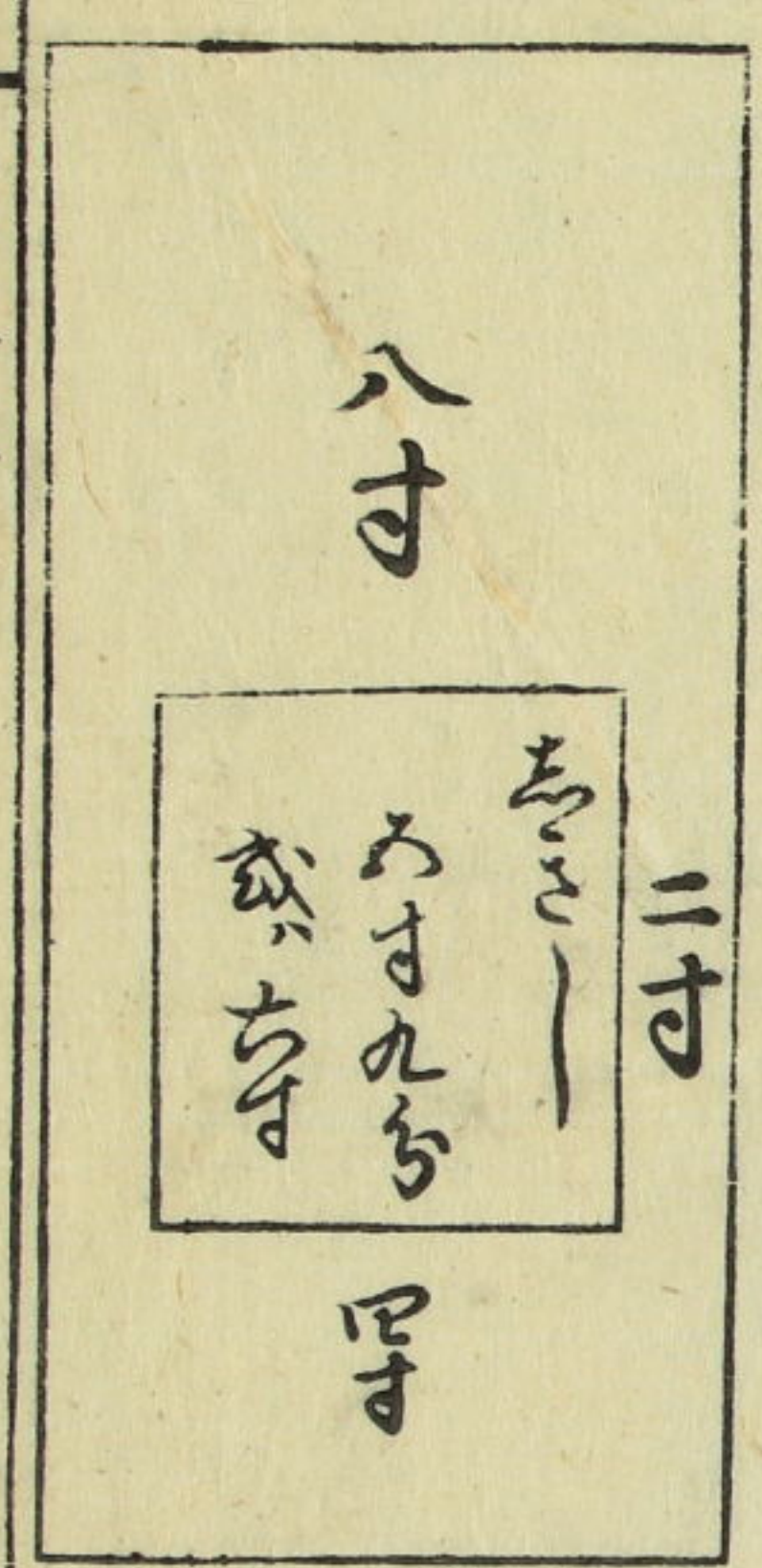
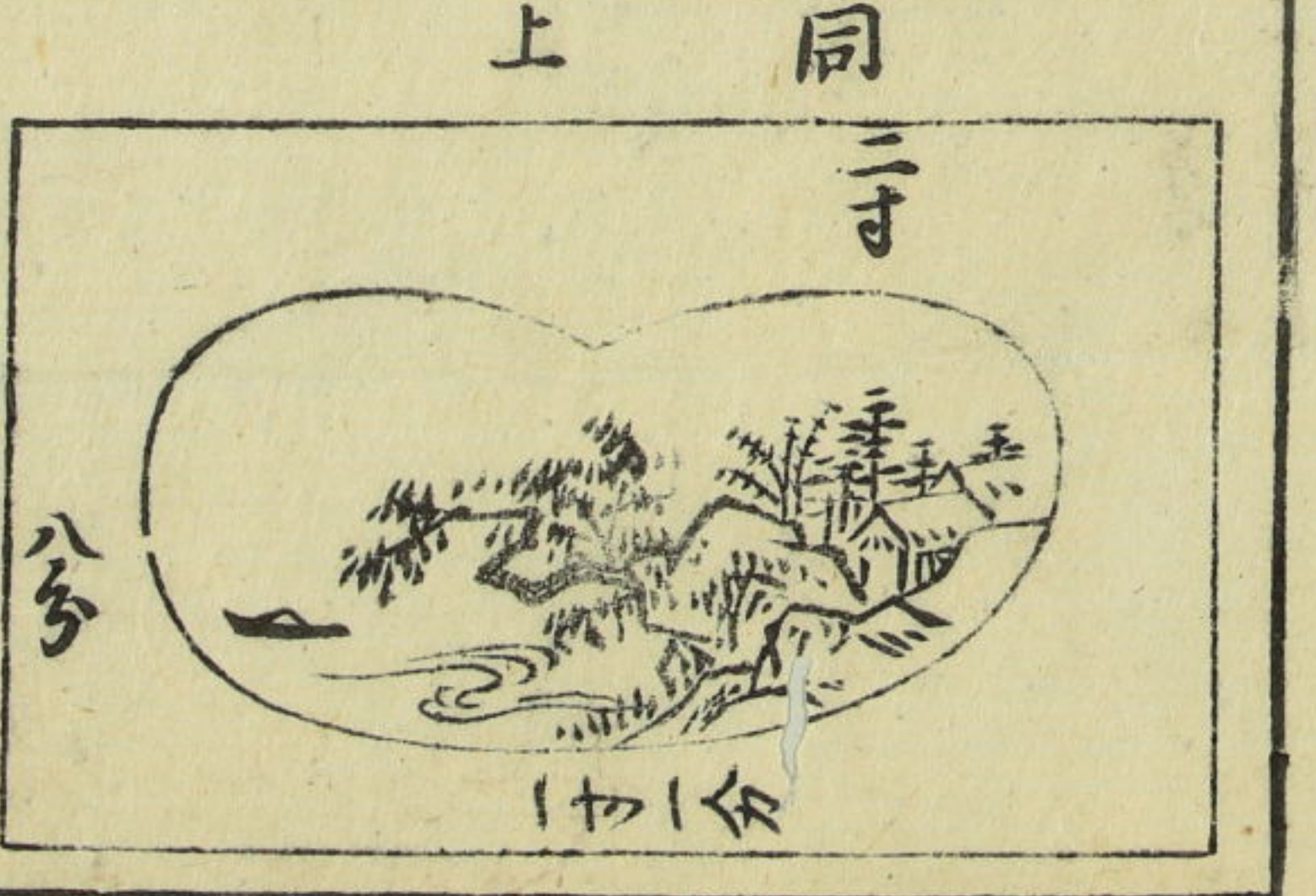
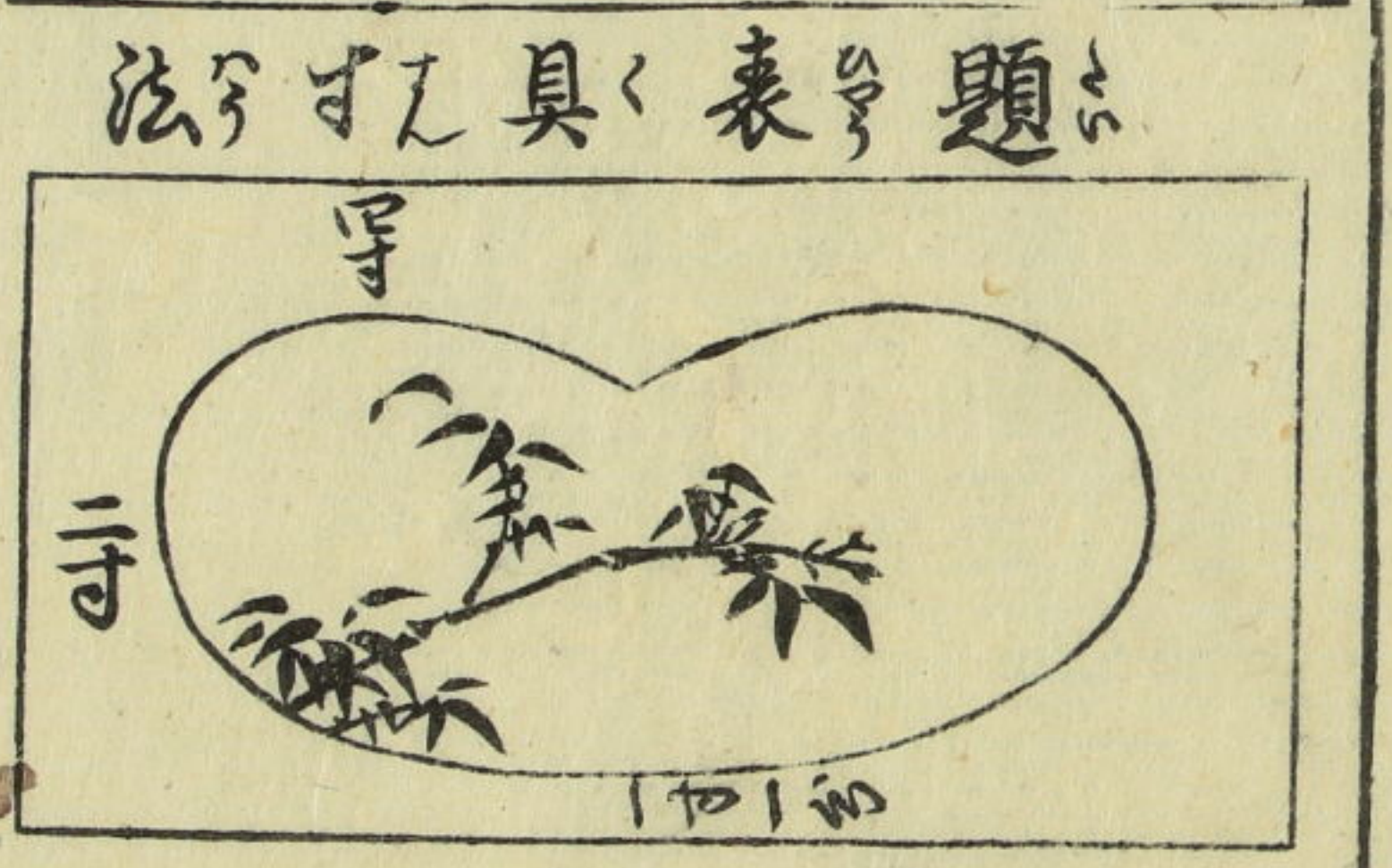
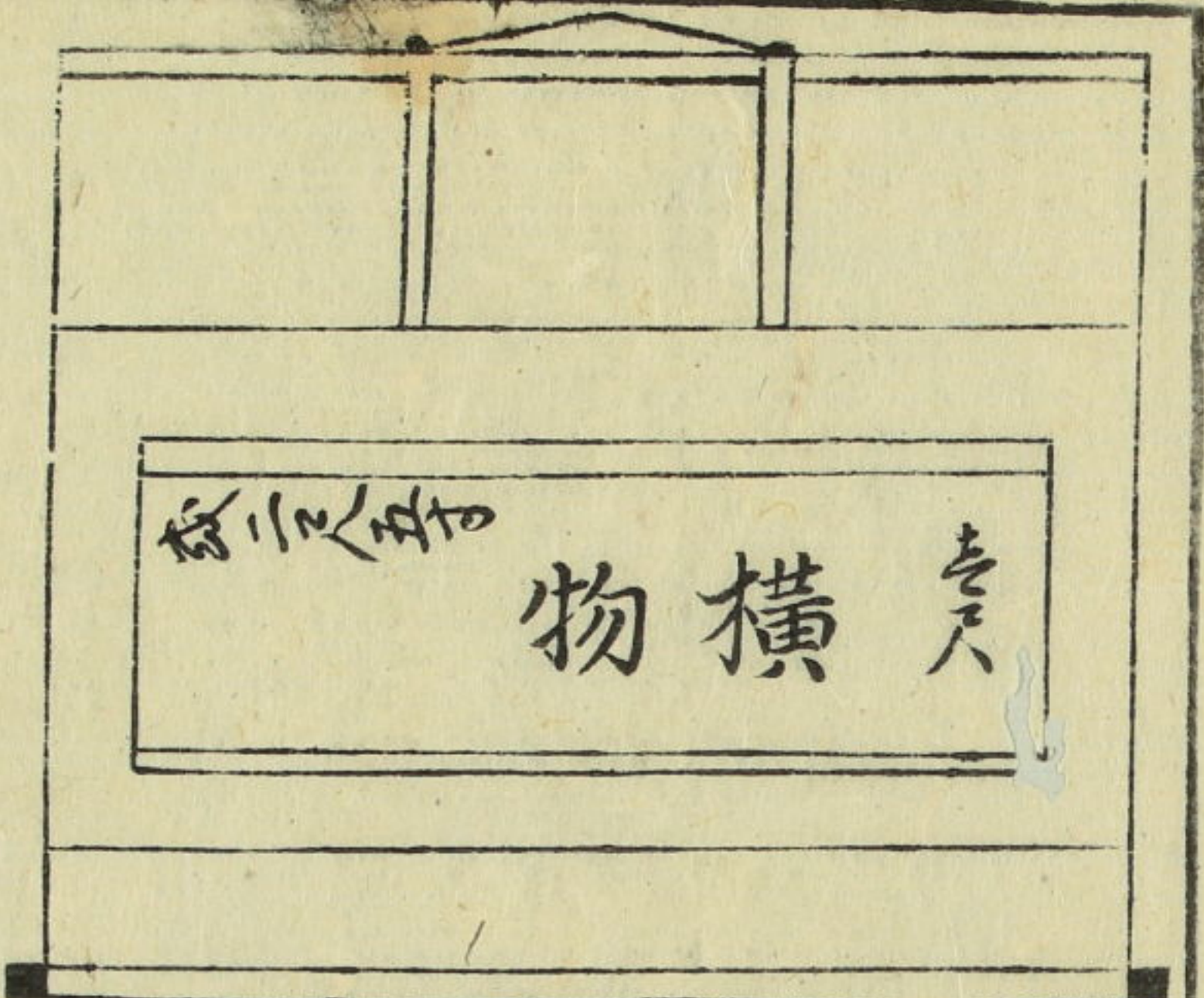
風帶の幅六寸

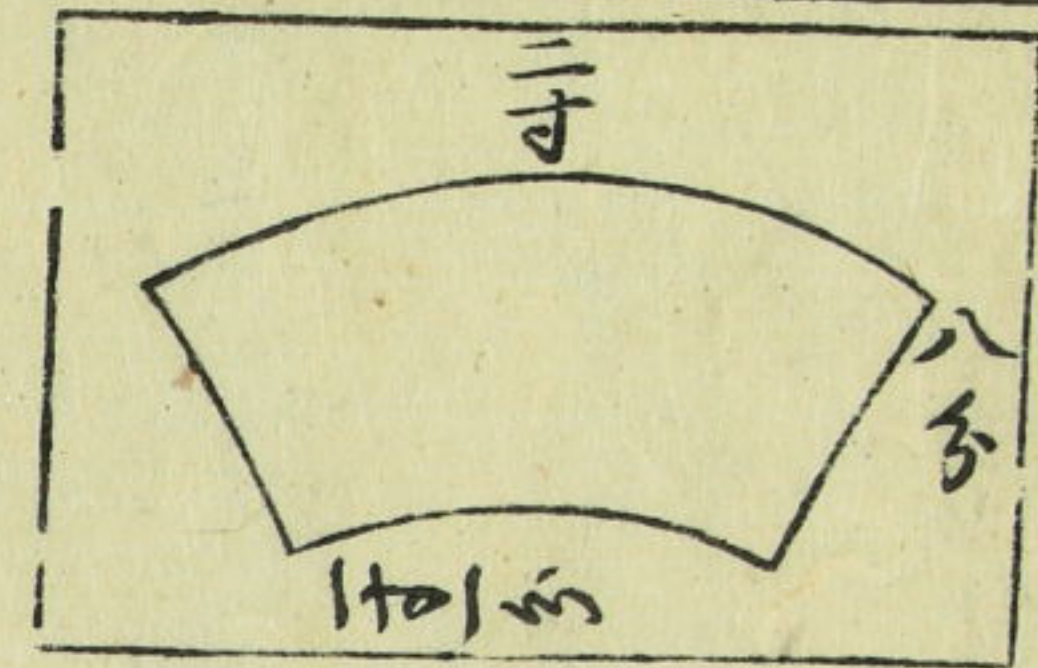
絵の寸法は定まりありとも大旨換の二倍より以上
一文字と寸の時は中縁は寸上類三人寸と寸計りして
一分を加えて下に用ひ標本の寸を五分〇位の寸縁換の度
とたりかゝると云同く換を寸五分と云換も五分〇
驚蟻の洞ニケおほも同すし〇堅縁おもてより有る





表のこの方より多く一葉の楕よぬ合がらむるのまじり
りぬ合つるこもあり





たいつと寸法定式ありと云ふまか
 らるる寸法大畧なり惣柄の拾好ま
 しく法定寸の旨に配當してお急し
 扱へりまじり

表具作方

はら紙と糸と引てかり強ようけをえはの裏入方に
 糸を付う紙を去て摺紙を用て腐粘よて裏あ
 陰乃表と卵よして紙張よ糸を離して紙よこり
 扱一文字を付中縁又と下と付軸扱の紙をつけ

摺ぬ紙よて裏と折強て別中縁のありよりと裏
 の方へ引うて風帯と付を乾ては陰の裏と外に
 して紙張よ付と下よ軸扱の紙を付てうて
 糸日と強てうけよて裏を裁て鬼皮よてうて
 糸より後子軸と標本を付てうけよて折強と
 付あり○中表の時の裏端よこり紙よこり
 付無裏とうけ○降風帯の文字と同さ
 付風帯の中縁と同さ

腐粘作方

冬月雪をぬて糸よて紙を煉壺よ入中
 半埋と急てうて折強と厚くもよて腐粘
 つうなる

新紙を^か西へ一大幅物の粘りよく小幅のはらうをくも
屋一^の角はの^軸定まり入るなり

屏風装方

先釘をトてつぎ紙をてる四角の神板と紙をり
又ハ氷なりとま一強液て糸と打魚一次のと釘
骨に粘を付一次の押をて紙と裁條つ
をま一板と同まてき骨之厚を分余條つの紙の厚
いをり一と合せ紙をて紙をと釘
とまりて切はり浮ぶりとする年をり粘をつけ
骨のつまり浮ぶりの上に表張をす一下の一粒
をりて屏風をとさしゆをてるに粘をせ乃

ととりりりり先をて重表六角の裏に浮液の上に二
筋をりて粉地とま一方ハ白聖百目黒とみ下に細
束して水をて粘り粘を加て引へ一次のとまり玉
と考て粘り粘と加て摸を付へ一

蝶尾寸方

六尺の屏風をとま下とみすりて中と出すりらん
六尺をり大小を依て又米なり

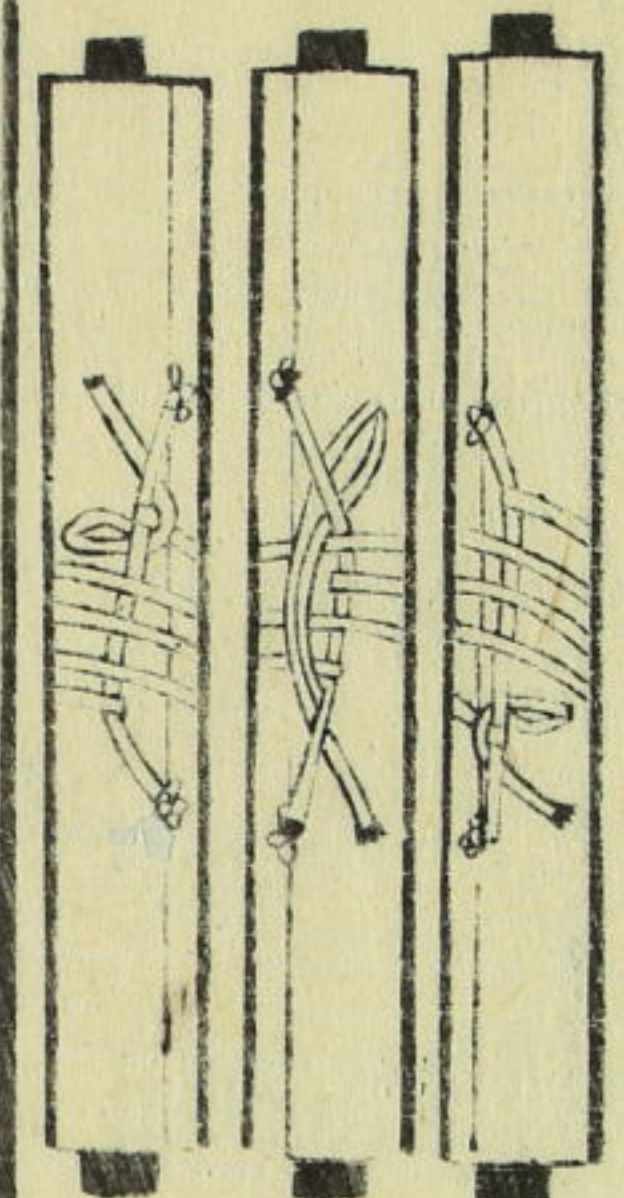
縁附方

古法の一文字通と云は先の縁を付て摸を付て通に
流の留と云はすくすくと切合りの故は出合た云こ

軸物巻切方

秘傳は曰せん軸とるふ切うて空奥の紙の底に
 と能のふと能合を折て折目と粘と付て軸と付て
 別子巻紙の換子小切る紙を吹く小口と壁を付て
 軸と一方より掛入まゝに半分内より押入るは
 軸の小口と肩より切ると又一方もかくの如くして何
 も一方より軸本と突出引換て是は粘と付て
 掛入

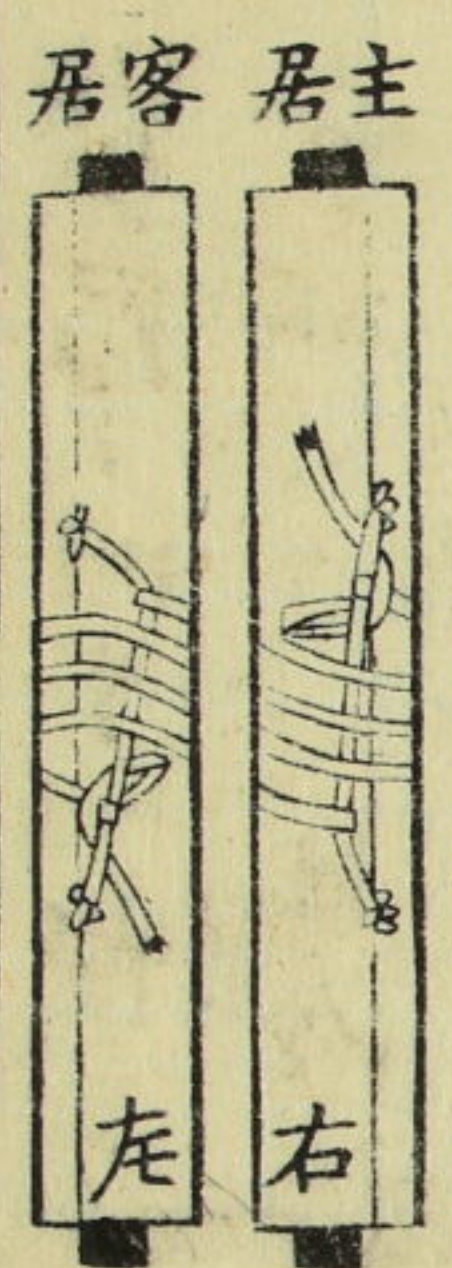
掛繪三幅一對之事



掛繪は之申すと云てを結と解
 下に是て風帯と云と一おを掛
 軸と掛りけ竿子換て掛あり

床へ入り釘を付けて軸とさうくと相ら一衝とて又
 右乃方とおの如くかけたまたとかけ掛さかんを流ハ三幅
 左乃印の方へ引へ一〇をづし換ハ左方より一つを
 結ハ右乃方へ引候を出一たよて流ハ止るは別印乃
 わる方と次また乃方と一つを結ハたの方へ引をを
 出ハ左の方を流ハ止るは別印の方と次は申すと云し
 右を流をとるは正中へ引出ハ申して遠て三川也一わら
 をこの方へ引候は左も右も一

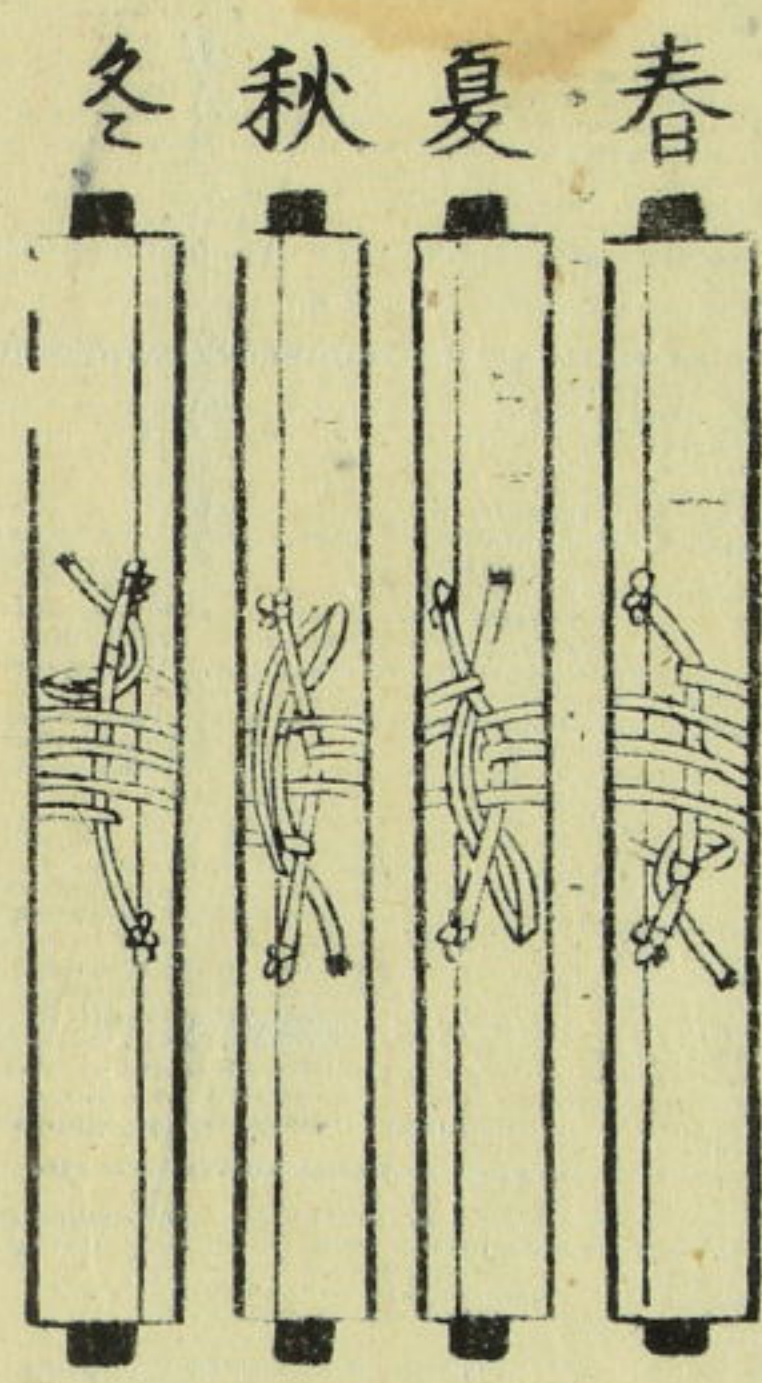
同一幅一對之事



掛軸は上座の方よりきたは緒
 左此方より掛納るは流ハ印乃

方へ引へ——○こつし格ハ係子よりをこつし——印乃方へ
流とくくをせき出——圓の如く流ハ止致はよ上在す
方も同下の方へ流と行寄と流ハ被む係ハ流へ入
た又流乃止つし加し去しとてたたと知こ

四幅一對之事

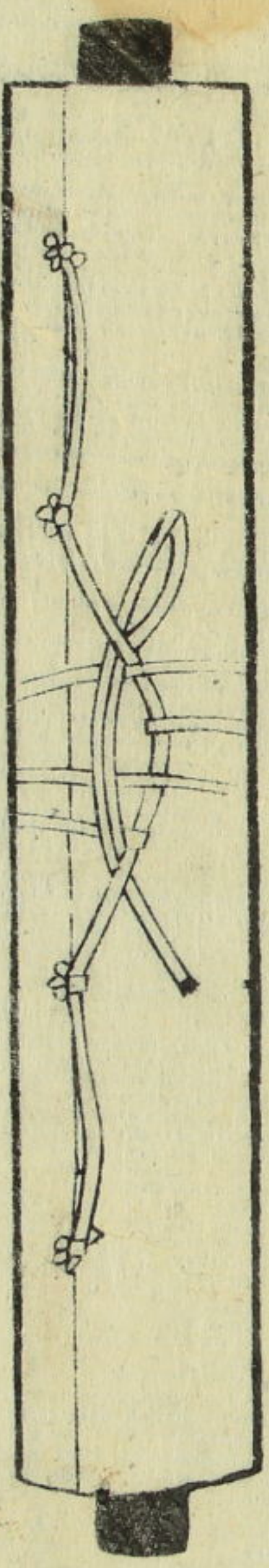


掛格ハ中の二幅の内客居より
初め次より至格とかけ次は服乃
客居より掛主格まで掛收こ
○こつし格ハ流の主おもらる

こつし印乃方よりをこつし——くくくとを収り又服乃
客居をとこつし——流ハ是と印代方よりをせき出同た

次は流の主格をとつし——正中へまを流を引出——あ
わふとを印乃方へ流——次は客居をとこつしと仕
き——同おたり

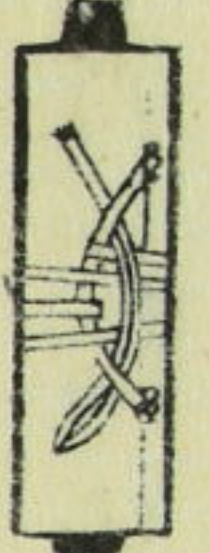
大横物之事



掛格ハ流と
こつし風者——と

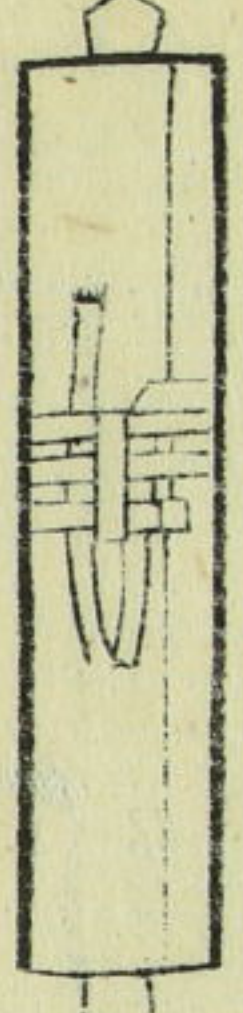
かと掛桿はこつし流と掛底へ入るま中——かをよ流
の方と氣又係子れ方と氣——正中の流とこつし——あ方
乃訂しそ符合するこ○こつし格ハ先ま中——つけ係
子代方をとつし——次は正中とこつしとこつし或三行訂地
とし云し巻緒止やうハ右よ流

柱隱之事



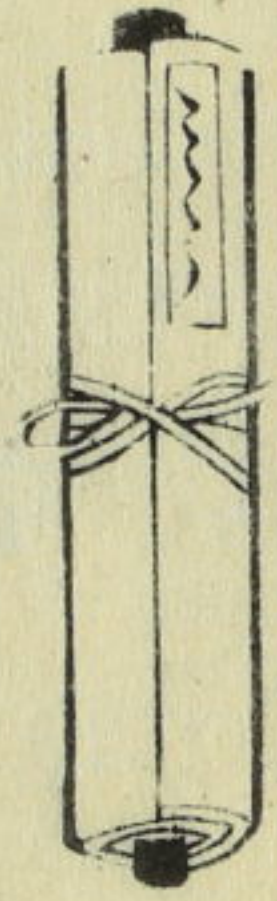
掛入つ一ハ幸一尺一幅物と同ーききと
伸るるのよ同ー

おまじの
おまじの
おまじの



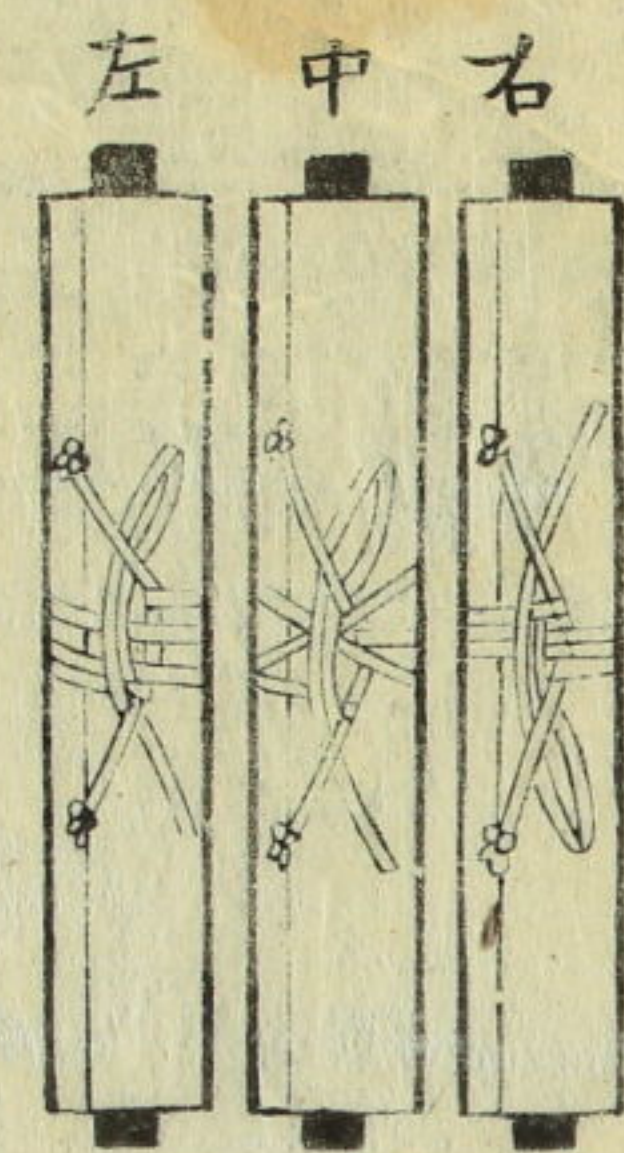
圓の如くならぬ巻るる(と新と指
うてお入へ緒を捻てかうがれを以て押入一わたの
ことおあふより一節を向へ引出と○まきま
と一してなるハ件の一節出より緒をねて引かんとく
るし法を表紙の四子の下には至也をさる又おる時
緒をさるくときをすてえれ如く巻くとぬ一是とさる
と一しりり大抵上巻の法に他も人のあつても

揚圖子仕とよ
ゆへー



又方緒太の方より引

三幅對秘方



緒はたいたの子と以て引たいたる
子と以て引ぬく申さひと平のわ
らう方と扱は結をまきゆることんる

草ハ三巻を世に
あふつて右に右よ返さう又まへ七巻まいしつひるを世

掛畫可人渡夏

廣き蓋よ入て伸るる後まき下よ巻て巻入の窓
控のまき板はうとさめの方を後以人の方へた板よ巻へ

襖九尺の室に掛あらし一三幅の時ハ客位向ふ
吾あくして坐し

同床掛事

三幅の時ハ中をうけ次客位及び二幅の時ハ客位向ふ
よハ客中主たり

同見方

書院等も同を五人引と通き座位も二尺申客
主と見張れ

同緒置方之事

絵の糸孔ある方に緯糸は添くさけを一つおき
わし

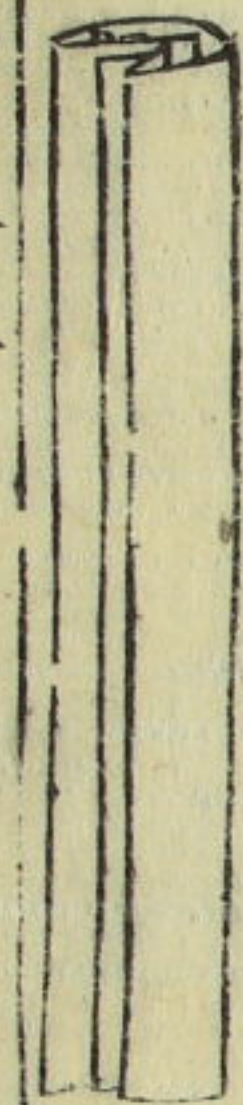
同床掛礼

床子紙を一張しとたのまくと床のじよわけ
子紙を掛け折訂まけりどよと添く添へ一畫と挂
時風草飾ぬ様よし

同主位客位

たを客位をとり又客位より入り客位ハ三幅の時
と客位ありたし客位より入り客位ハ三幅の時
客位の絵二幅の時ハ北に主位南に客位
客位の向ふ

同挂畫挂字包法



紙と二重うして一方の端と折く

又外へ折出し又おの階よりとれくときて申す盡くと
入ましく包正中を各引くと様々大小の段の太い俵入

白繪之屏風

婦入の時よれを月の経ハ鶴亀松竹或は鳥と胡
粉より描銀の泡をを月の裏摸ハ粉地ハ雲母をを
白一縁ハ白帛ふらと白塗より

享保六辛酉歳季夏吉旦

浪花書肆

伊丹屋茂兵衛 連刻
同 新兵衛

Handwritten notes at the bottom of the page, including the characters '浪花書肆'.

